

アドルノによる二つのハイネ講演，あるいは文化批判と社会

橋本，紘樹

<https://hdl.handle.net/2324/7234017>

出版情報 : Neue Beiträge zur Germanistik. (156), pp.174-191, 2018. Japanische Gesellschaft für Germanistik

バージョン :

権利関係 : © 2018 Japanische Gesellschaft für Germanistik



アドルノによる二つのハイネ講演、 あるいは文化批判と社会

橋 本 紘 樹

はじめに

第二次世界大戦の終結に伴い、亡命地であるアメリカからドイツへと帰国したテオドル・アドルノは、双方の国でハインリヒ・ハイネについて講演を行っている。よく知られているのは、現在『文学ノート』に収録されている『ハイネという傷』（以降ドイツ講演と表記）であろう。ドイツ講演は、当初著作としての公刊が予定されていたわけではなく、ハイネの没後100周年の1956年に、ケルンの「西部ドイツ放送」からラジオで放送されたものである。そして、この講演の陰に隠れて見落とされてきたのが、1949年に亡命地からドイツへ帰国する前年の1948年に、アドルノがロサンゼルスで行った英語での講演『ハイネの再評価に向けて』（以降アメリカ講演と表記）である。ドイツ講演はこれまで、ハイネの受容史において、反ユダヤ主義的傾向を孕むカール・クラウスのハイネ批判の延長で捉えられてきたほか、¹⁾ アドルノ研究の側からは、アドルノ文学論解説の切り口として論じられてきた。²⁾ また、ホーエンダールはアドルノのハイネ解釈を文献学のおよび実証的に検証し、その問題点を指摘するだけでなく、ユダヤ性をめぐるアドルノの理論と、ハイネのユダヤ性に関するドイツ講演での言及との間にある矛盾に着目し、それをアドルノのエッセイ理論に結びつけて解釈している。³⁾ このように

※本稿は、2017年独文学会秋季研究発表会での口頭発表をもとに構成されている。また、日本学術振興会および科研費（課題番号17J02762）の助成を受けた研究成果である。本稿におけるアドルノの著作への言及は、Theodor W. Adorno: Gesammelte Schriften [=GS], 20 Bde. Hrsg. von Rolf Tiedemann. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1970–1986より行い、本文中に略号と巻数、頁数を記す。

1) Vgl. Jeffrey L. Sammons: Heinrich Heine. Alternative Perspectives 1985–2005. Würzburg (Königshausen & Neumann) 2006, S. 214; Jost Hermand: Heinrich Heine. Kritisch. Solidarisch. Umstritten. Köln (Böhlau) 2007, S. 195; Dietmar Goltschnigg/ Hartmut Steinecke: Heine und die Nachwelt. Geschichte seiner Wirkung in den deutschsprachigen Ländern. Texte und Kontexte, Analysen und Kommentare. Bd. 2: 1907–1956. Berlin (Erich Schmidt) 2008, S. 146f.

2) Vgl. Philipp von Wussow: Adorno über literarische Erkenntnis. In: Nicolas Berg/Dieter Burdorf (Hrsg.): Textgelehrte. Literaturwissenschaft und literarisches Wissen im Umkreis der kritischen Theorie. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 2014, S. 159–183, hier S. 170ff.; 細見和之: テキストと社会的記憶——アドルノのハイネ論にそくして [『アドルノの場所』(みすず書房) 2004, 107–139 頁]。

3) Vgl. Peter Uwe Hohendahl: Adorno als Leser Heines. In: Ders. (Hrsg.): Heinrich Heine. Europäischer Schriftsteller und Intellektuelle. Berlin (Erich Schmidt) 2008, S. 208–221.

ドイツ講演はいくつかの観点から論じられてはいるが、いずれの考察でも依然としてアメリカ講演は視野の外に置かれている。そして、このアメリカ講演自体もまた、当時の両親との書簡の中でそれが活況を呈したと伝えられているものの、⁴⁾ これまでほとんど論じられておらず、オルシュナーが、現代における詩の可能性が主題になっていると簡単に指摘するに留まっている。⁵⁾

ハイネのユダヤ性の解釈をはじめ、差異が散見される両講演間には、亡命からの帰国という、アドルノの生涯における極めて重要な転換点があった。当時の時代情勢、ハイネ受容は両国で異なるものであったうえに、アドルノ自身の文化観も亡命時と共通点はあるものの、戦後ドイツの知的状況を前に微細に変化している。概して、ハイネ講演の分析はアドルノのテキスト内部で行われてきたが、二つの講演におけるアドルノの企図を解明するには、テキストの外在的コンテキストや、それと密接に結びつく彼の文化観を踏まえ、両講演を比較考察する必要があるだろう。これらの分析を通じて、アドルノが両講演において、それぞれ議論の焦点を変えながら時代状況への批判を志向していたことが明らかとなってくる。そして、そこから浮き彫りになるドイツ講演の試みは、戦後ドイツにおける彼の知識人像に新たな光をあてるものでもある。

アドルノは、マックス・ホルクハイマーとともに大学行政に尽力し、西ドイツのアカデミズムの発展に寄与しただけでなく、⁶⁾ 新聞やラジオなどメディアでの発言を通じて当時の政治・文化に少なからず影響を与えた。従来は戦後ドイツにおける社会批判的な役割が強調されてきたが、⁷⁾ 近年クレメンス・アルブレヒトたちが、戦後西ドイツの「知的基盤形成」への貢献という、単なる批判とは異なる建設的で「形成」的な側面を主張している。⁸⁾ 本稿「おわりに」では、ドイツ講演の分析をアドルノにおける「批判」と「形成」についての議論へと接続し、これまで見落とされてきた両要素の関係を抽出したい。

4) Vgl. Theodor W. Adorno: Briefe an die Eltern 1939–1951. Hrsg. von Christoph Gödde/ Henri Lonitz. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 2003, S. 482f.

5) Vgl. Leonard Olschner: Heine-Lektüre und Lyrik-Verständnis bei Adorno. In: Dietmar Goltchnigg/ Peter Revers/ Charlotte Grollegg-Edler (Hrsg.): Harry ... Heinrich ... Henri ... Heine. Deutscher, Jude, Europäer. Berlin (Erich Schmidt) 2008, S. 319–326.

6) Vgl. Alex Demirović: Der nonkonformistische Intellektuelle. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1999.

7) 学生運動の理論的支柱となるなど、フランクフルト学派が徹底した社会批判を行ったことで、ドイツの伝統が崩壊したという評価は現在でも一部で支持を得ている。Vgl. Rolf Kosiek: Die Machtübernahme der 68er. Die Frankfurter Schule und ihre zersetzenden Auswirkungen. Tübingen (Hohenrain) 8. Aufl. 2011.

8) Vgl. Clemens Albrecht/ Günter Behrmann u. a.: Die intellektuelle Gründung der Bundesrepublik. Eine Wirkungsgeschichte der Frankfurter Schule. Frankfurt a. M./ New York (Campus) 1999.

1 アメリカ亡命時の文化観

アメリカ講演を分析する準備として、まず当時のアドルノの文化観に触れておく。1938–1949年のアメリカ亡命に関して、西洋の文化を重んじたアドルノは、「文化産業」を体現したアメリカ文化を嫌悪し、亡命地に馴染なかつたとされてきた。⁹⁾しかし、彼が単に嫌悪するだけでなく、アメリカ文化の分析を通じて、時代状況への批判を具体的な文脈に即して実践に移す方途を探っていたことが新たに解明されている。例えば、ハンス・アイスラーと執筆した『映画のための音楽』で、ハリウッドの撮影所内部で映画作曲家が果たしうる抵抗について考察されている他、¹⁰⁾『マーティン・ルーサー・トーマスのラジオ演説の心理学的テクニック』では、プロパガンダに対してカウンター・プロパガンダを対置する構想が練られている。¹¹⁾また、自律的な精神文化は存在しえず、全ての文化活動が社会に媒介されているとするアドルノの洞察はよく知られているが、¹²⁾この認識は亡命時からすでに存在していた。『ミニマ・モラリア』に登場する次の文章は、1944年に執筆されている。

社会的営みから距離をとっている人〔知識人〕も、それに没頭している人と同じくらい社会にからめとられている。〔…〕私たちは、教養の退廃を口にする。しかし、ヤーコプ・グリムやバツハオーフェンのものと比べれば、私たちの書く散文は、無自覚に用いる言い回しにおいて、文化産業に類似しているのである。(GS4, 27f.)

一見社会から切り離されているように見える知識層もまた、社会的認識に媒介されており、純粋な文化や教養を体現することは不可能である。しかし、アドルノは文化や教養を欺瞞として単純に捨て去ることはせず、非常に両義的な形でその意義を捉えていた。

しかし、自由で公正な交換それ自体が嘘であるなら、それを否認するものは同時にまた真理を保証してもいる。商品世界の嘘に対して、それを告発する嘘はなお矯正の役割を果たすのである。今日に至るまで文化が失敗しているという事態は、その失敗を促進することを正当化するものではない〔…〕。(GS4, 49)

文化は社会を支配する交換原則(=同一化)を拒絶するが、先述のように、この拒絶は欺瞞である。しかし、資本主義の交換原則の下にある社会がすでに虚偽である以上、それを拒絶する嘘、すなわち文化や教養の意義もまた存在することになる。アメリカ講演を行った当時のアドルノは、高級文化の自律性を退けつつ、その意義を保持するという課

9) マーティン・ジェイ(今村仁司他訳): 永遠の亡命者たち——知識人の移住と思想の運命(新曜社)1989, 209–235頁参照。

10) 竹峰義和: アドルノ, 複製技術へのまなざし——〈知覚〉のアクチュアリティ(青弓社)2007, 152–226頁参照。

11) 同上, 230–239頁参照; Shannon L. Mariotti: Adorno and democracy. Lexington (University Press of Kentucky) 2016, S. 123–143.

12) 例えば、マーティン・ジェイ(木田元他訳): アドルノ(岩波書店)2007, 179–274頁参照。

題に直面していたのである。

2 アメリカ講演『ハイネの再評価に向けて』

アメリカでは20世紀前半にハイネは高い関心を集めており,¹³⁾第二次大戦後1948年ごろまで、市民的な個人主義やコスモポリタニズムの観点から、非常に進歩的なハイネ像が支配的であった。しかし、東西冷戦の影響もあり、その傾向は急速に衰え、次第にハイネの詩的・芸術的側面が取り上げられるようになる。¹⁴⁾

ロサンゼルス大学におけるアメリカ講演では、当時の時代情勢には直接言及されず、ドイツにおけるハイネ受容から話が始められる。アドルノによれば、19世紀にハイネの詩は人気の絶頂にあったが、20世紀に入り、クラウスやゲオルゲ・クライスを筆頭に、ハイネの詩の「安っぽい大衆性」が「ドイツ文化における危機に意識的になり始めた知識人たちの間で反発を引き起こした」(GS20-2, 441f.)。彼らの批判を確認しておく、クラウスは、言語批判の観点からハイネの詩的表現に焦点を当て、そのジャーナリズム性を厳しく糾弾し、「ハイネは言葉を無鉄砲に用いる人物だった」¹⁵⁾と評した。それだけでなく、ドイツ語による言語芸術に重きをおくクラウスは、大衆的で、「文芸欄的」な詩を書くハイネの言語使用の中にユダヤ的要素を読み取り、反ユダヤ主義的傾向を強く孕む議論を行った。¹⁶⁾また、ゲオルゲ・クライスの代表的人物フリードリヒ・グンドルフは、「不滅性」と「近代性」や「深さ」と「浅薄さ」、「詩作」と「日々の仕事」といった二項対立を用い、前者にゲーテを、後者にハイネを位置付け、辛辣に批判を行っている。¹⁷⁾彼もまた、「彼〔ハイネ〕のドイツ的な苦悩ではなく、ユダヤ的な苦悩が、彼を人気者にしてしているのだ」¹⁸⁾と述べ、大衆性というハイネの否定的側面をユダヤ性に結びつけ、反ユダヤ主義的な評価を下した。こうした受容を念頭に置きつつアドルノは、ハイネの過剰な拒絶の原因を「ハイネの詩それ自体に固有の性質に対する、深く両義的な感情」に見て取り、この「両義的な感情」は批判者の心理的な「不安 (the malaise)」であるとす (GS20-2, 442)。アメリカ講演の主眼は、批判者たちを「不安」にするハイネの詩の性質の解明を通じて、その「再評価」を行うことにある。

まず、このような感情を喚起するハイネの詩を、ユダヤ性の観点から解釈することに

13) Vgl. Sammons, a. a. O., S. 224.

14) Vgl. Hermand, a. a. O., S. 184f.

15) Vgl. Karl Kraus: Heine und die Folgen. In: Christian Wagenknecht/ Eva Willms (Hrsg.): Schriften zur Literatur. Göttingen (Wallstein) 2014, S. 77–114, hier S. 103 [カール・クラウス (山口裕之 / 河野英二訳): 黒魔術による世界の没落 (エートル業書) 2008, 110–161 頁]。

16) Vgl. Karl Kraus: Die Feinde Goethe und Heine. In: Fackel, 17. Band (1915), S. 52–89, besonders S. 59–61 und 89. また以下も参照。Goltschnigg/ Steinecke, a. a. O., S. 45–48.

17) Vgl. Friedrich Gundolf: Zeitalter und Aufgabe. In: Ders. (Hrsg.): George. Berlin (Bondi) 1920, S. 1–31, besonders S. 10–12; Goltschnigg/ Steinecke, a. a. O., S. 59f.

18) Vgl. Gundolf, a. a. O., S. 11.

アドルノは異議を唱える。そうした解釈が持つ反ユダヤ主義的なステレオタイプは、「現代の社会心理学が明確に示すように、投影のメカニズムによるものである」からだ (GS20-2, 443)。こうした理解には、反ユダヤ主義に特有の本質は存在せず、あるのはただ、心理学的あるいは経済的な社会構造から生まれた「レッテル貼り」の作用であるとする当時のアドルノの見解が反映している。¹⁹⁾ 亡命期の主著『啓蒙の弁証法』では、「反ユダヤ主義は誤った投影に基づいている」(GS3, 211)とされ、結論部で反ユダヤ主義の「反動的なレッテル (das reaktionäre Ticket)」について説明されている。そうしたレッテル思考は、「根源的に、ユダヤ人に向かうのではなく、むしろある衝動志向を形成している」のであり、「その志向はレッテルによって初めて、迫害するのに手ごろな対象を受け取るのである」(GS3, 232)。ユダヤ人の規定は迫害者によって生み出されるため、本質主義的に把握できないという洞察は、アメリカ講演にも通じている。ハイネのユダヤ性についてアドルノは、「彼の媒体であるドイツ語が、それ〔ユダヤ人の特徴〕を非ユダヤ的な要素から分離するのをほとんど不可能にしています」と語り (GS20-2, 443)、本質主義的な議論を退け、こう主張する。

ジャーナリズム的なマスコミュニケーションによる詩作への侵攻という初期の現象の一つとして、彼の作品を特徴づけているものを、ハイネがユダヤ人であるということに帰するのは不合理なことでしょう。(GS20-2, 443)

ユダヤ性を基盤にするのではなく、「ジャーナリズム的なマスコミュニケーションによる詩作への侵攻という初期の現象の一つ」として、つまり「彼〔ハイネ〕が巻き込まれていた歴史的ダイナミズム」から、ハイネを解釈する必要性が説かれることになる (GS20-2, 443)。

こう考えるアドルノの目に映るのは、「抒情詩は、この醒めて、冷淡で、脱魔術化された初期産業社会で一体いかに可能か」という問題に直面するハイネである (GS20-2, 443)。それに対するハイネの解決策はこう語られる。

詩と経験の世界との距離を、抒情的言語と日常言語との距離を強調する代わりに、ハイネはこの距離をラディカルに切り詰めようとしたのでした。もし、〈偉大な様式〉が内実を失ったのであれば、ハイネはそれを放棄することによって、その内実を救い出そうとしたのです。(GS20-2, 446)

「抒情的言語」と「日常言語」の分裂を糊塗するのではなく、両者の距離を取り払うことで、資本主義における抒情詩の内実を保持しようとするハイネの姿勢が明確に述べられる。そしてアドルノは、ハイネが「〈偉大な様式〉」を放棄してまで抒情詩に固執する理由を、「詩の形式それ自体を維持することによってのみ、俗に〈理想〉と呼ばれるかもし

19) 『啓蒙の弁証法』の反ユダヤ主義の考察で展開される、「レッテル思考」については以下 Vgl. Eva-Maria Ziege: Antisemitismus und Gesellschaftstheorie. Die Frankfurter Schule im amerikanischen Exil. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 2009, S. 131-135.

れないもの」を救い出すためであったと評する (GS20-2, 447)。しかし、このような試みはその欠点と不可避的に結びつく。両言語間の距離を取り去ることで、詩が商業的性格を帯び、ハイネの用いるロマン派的表現が、「聞きやすさ」や「覚えやすさ」を備えた定型句と化すのである (GS20-2, 450)。ここで、かかる欠点を持つハイネの詩が、その批評者を「不安」にする構造が明らかにされることになる。

ハイネは詩を市場に売り渡したけれども、彼の作品の本質を通じて、市場に対抗する詩はまさにその対立によって、市場の品質表示を押されることを表現したのでした。彼の詩から発せられる不安 (the malaise)、つまりその詩のいくぶんショックキングでスキャンダラスな作用は、自身の不可能性を告げる芸術の作用なのです。(GS20-2, 450f.)

ハイネが浮き彫りにするのは、市場に抵抗する行為自体が、市場を強く意識しており、もはやそこから独立して詩作を営むことが不可能な社会的状況である。ここに、批評者の「不安」の原因も存在する。「不安」は、ハイネの詩が、芸術の自律を掲げハイネを批判する批評者に、その不可能性を否応なく認識させるために生じてくる。そして、アドルノはハイネの詩のまさにこうした特徴に、その「再評価」の可能性を見て取る。ハイネは、「詩作がジャーナリズムへ変容する[...]その瞬間を保持することを通じて」、「近代世界の原型」を写し取っているからこそ、偉大な詩人として評価されるべきなのである (GS20-2, 451)。

最後にアドルノは、「進歩の弁証法」という語でアメリカ講演を締めくくる。当時アメリカで流布していた英語訳で『歌の本』の詩群「北海」から引用がなされ、²⁰⁾「ハイネにおいて生き続けているものは、敗れ去った神々のために戦い、歴史の無慈悲な判決に抗い続ける、生来の抗議の力であるように思われるのです」と結ばれる (GS20-2, 452)。アドルノの目に映るのは、高度に発展する資本主義という現実立ち向かい、時代にそぐわない詩の記念碑的性格や威厳に抗議しながらも、「敗れ去った神々」と形容される抒情詩の伝統を顧みるハイネであった。こうした試みをアドルノは「進歩の弁証法」と呼んでいるのである。

アメリカ講演を取り上げたオルシュナーは、終戦直後のアメリカで公衆を前にハイネを語るという問題意識は背景に退き、抒情詩の可能性が主題化されていると捉え、ここで展開されるハイネ理解を亡命前後のアドルノの抒情詩理解の線上に位置付けている。²¹⁾ その際参照されているのは、一つは、亡命以前に書かれた論考である。もう一つは、1949年帰国直前に執筆されていたものの、帰国後の1951年に初めて発表された論考『文化批判と社会』の中に登場し、抒情詩をめぐる戦後ドイツのディスクールに強い影響を与

20) ここでアドルノが用いたのは、アメリカで当時流布していたルイ・ウンターマイアーによる英語訳である。ウンターマイアーについては、Vgl. Sammons, a. a. O., S. 223-242.

21) Vgl. Olschner, a. a. O., S. 322ff.

え、以後アドルノ自身何度も立ち返ることとなった「アウシュヴィッツの後に詩を書くことは野蛮である」の一節である。オルシュナーはアドルノの問題意識の連続性を明らかにしているが、アメリカ講演には簡単にしか言及しておらず、それを当時の固有の文脈に照らして検討できていない。しかし次章で詳述するように、ドイツ帰国後の彼の文化観においては、文化や教養の両義性についての洞察は受け継がれているものの、戦後ドイツで生じた文化の復古主義に対する批判が顕在化しており、そうした状況を前に文化の意義を保持する可能性についてのより詳細な議論がなされている。こうした変遷を踏まえれば、詩とジャーナリズムの軸で捉えられたハイネ像には、資本主義下の文化の意義をめぐる亡命時のアドルノの文化観やユダヤ性についての見解が強く表れていることにも着目すべきだろう。何より、当時のアドルノの問題意識を考慮することで初めて、結論部のアドルノの意図もまた明らかとなる。「進歩の弁証法」で話が結ばれるのは、講演の場がアメリカ、それも文化産業を体現したハリウッド近郊のロサンゼルスであることを考えれば示唆的である。亡命地で現実への視座を失うことなく、微力ながらも批判の契機を探っていたアドルノは、高度に発展する資本主義下において伝統を顧みる必要を説くことで、時勢への批判を試みていたと考えられる。当時思索されていた詩の可能性という抽象的な問題がハイネに即して展開され、それが結論部で当時のアメリカ社会を取り巻く時代状況への批判へと結びつけられているのである。

こうした議論の展開は、ドイツ講演には見受けられない。では、アドルノは戦後西ドイツでハイネを論じる際に何を志向していたのか。彼の試みを明らかにするために、次章ではまず1950年代の西ドイツの文化的状況と、それに対するアドルノの洞察を概観しておこう。

3 戦後ドイツにおける「マンダリン」的文化的保守の復古とアドルノの文化批判の構想

保守的なアデナウアー政権下の政治状況と密接に結びつき、戦前との連続性を有していた当時の復古的文化情勢を理解するのに有益なのは「マンダリン」という概念である。この言葉は、リンガーが1890-1933年のドイツアカデミズムの分析に用いて以来、²²⁾特にフランスとの対比で、ドイツの知的文化状況を指示する語となった。²³⁾ブルジョワ的教養エリート層からなるマンダリン的文化的保守は、精神と国家を同一視し、崇高な精神と文化を顕揚する姿勢を持っており、それは多くの場合、国粹主義的態度と反ユダヤ主

22) Fritz K. Ringer: *The decline of german mandarins: The german academic community, 1890-1933*. Cambridge (Harvard University Press) 1969 [フリッツ・リンガー (西村稔訳): 読書人の没落——世紀末から第三帝国までのドイツ知識人 (名古屋大学出版会) 1991]。

23) Vgl. Hauke Brunkhorst: *Der Intellektuelle im Land der Mandarine*. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1987; Claus-Dieter Krohn: *Intellektuelle und Mandarine in Deutschland um 1930 und um 1950*. In: Alexander Gallus/ Axel Schildt (Hrsg.): *Rückblickend in die Zukunft. Politische Öffentlichkeit und intellektuelle Positionen um 1950 und um 1930*. Göttingen (Wallstein) 2011, S. 51-69.

義に結びついた。²⁴⁾ 彼らは精神の支配を主張し、下位に位置すると見られた政治から距離を置く。こうした特徴を持つ知識層が生む保守的な雰囲気は、1920–30年代の大衆の躍進や民主主義の進展により、教養エリートが存在基盤を脅かされたことで高揚した。かかる風潮は、伝承されてきた国民文化の伝統に根差した閉鎖的な思考様式の反映であり、教養エリートが次第に現実的な問題と乖離していく原因となった。多くの場合マンダリンは、意識的あるいは無意識的に、ナチスの民族共同体的イデオロギーに接続していくことになる。

1947年に生じた、戦争で焼け落ちたゲーテハウスの再建問題に象徴されるように、終戦直後にすでに、文化的伝統に精神的支柱を求める動きが存在していた。²⁵⁾ 翌年には、国家再建のため物質的・経済的復興を最優先したアデナウアー政権により非ナチ化政策の終了が告げられ、戦前のマンダリン的文化風潮が再び蔓延する。その際に顕著であったのは、「過去への省察」の欠如である。これは、国内で精神的にナチスに抵抗していたことを意味する「国内亡命」という言葉が、しばしば弁明として持ち出されたことにも見て取れる。²⁶⁾ そして過去との断絶を試みる姿勢は同時に、政治とは離れ、芸術性を追求する動きを生んだ。代表的な例は、芸術作品の内在的解釈を志向する「作品内在解釈」である。²⁷⁾ 一方で、当時から復古的情勢への懐疑的視線があったことも忘れてはならない。戦後西ドイツの代表的雑誌『フランクフルター・ヘフテ』の編集者ヴァルター・デアクスの『時代の復古的特徴』(1950)や、マックス・フリッシュの『アリバイとしての文化』(1949)はその先駆的事例である。²⁸⁾ こうした背景が、亡命から帰国後のアドルノの活動には存在していた。

1949年にドイツへ帰国したアドルノは、文化の復古主義への批判を展開していく。

24) 以下のマンダリンの特徴と発展に関する記述は、先行研究を簡潔にまとめたクローンの記述に主に依拠し、適宜補足を加えた。Vgl. Krohn, a. a. O.

25) ゲーテハウスの再建問題に関しては、山口知三：『廃墟をさまよう人々——戦後ドイツの知的原風景』(人文書院)1996, 354–363頁；三島憲一：『戦後ドイツ——その知的歴史』(岩波書店)2007, 38–44頁参照。

26) もちろん「国内亡命」の状態にあった者たちすべてがナチスに加担したわけではなく、その内実は多岐にわたる。その機微については、山口〔前掲書〕の記述が詳しい。

27) Vgl. Brunkhorst, S. 97ff.; Joachim Rickies: Einleitung. In: Ders. (Hrsg.): *Bewundert viel und viel gescholten. Der Germanist Emil Staiger*. Würzburg (Königshausen & Neumann) 2009, S. 13–26; ヨースト・ヘルマント (斉藤成夫訳)：『ドイツ近代文学理論史』(同学社)2002, 123–138頁。

28) デiakスは後に、社会研究所の委託により、『現代社会学の諸相：社会学理論への補遺』というハンドブックをアドルノと共同で出版する。シュテファン・ミュラー＝ドーム (徳永恂監訳)：アドルノ伝 (作品社)2007, 466頁参照。またアドルノは、1949年5月28日付ホルクハイマー宛ての手紙で、フリッシュの『アリバイとしての文化』を「立派な」記事であると評価している。Theodor W. Adorno/ Max Horkheimer: *Briefwechsel 1927–1969*. Bd. 3: 1945–1949. Hrsg. von Christoph Gödde/ Henri Lonitz. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 2005, S. 264.

1950年5月に『フランクフルター・ヘフテ』に掲載された『復活した文化』²⁹⁾では、「伝統的な意味における文化は死んだ」ということが人々に意識されていない事態に警鐘が鳴らされている(GS20-2, 454f.)。そして、「今日、文化の永遠なる価値に依拠しようと思う者は、そこから新たな血と大地のようなものを作り出す危険にすでに陥っているだろう。しかし、そうした一般的な考察を超えてその文化的復興が示しているのは、批判的な熟考を要する兆候である」と語られ(GS20-2, 456)、時計の針を巻き戻すような文化の復古に対する批判が展開された。その後、文化の意義をめぐる理論は練り上げられ、1960年に発表された『半教養の理論』ではより精緻な議論が展開されている。そこで、アドルノは文化、すなわち教養を絶対視する態度を批判し、教養概念の疑わしさを浮き彫りにする。

それ〔教養〕は条件として、自律と自由を持つ。しかし同時に、それは今日に至るまで、個々人に与えられ、ある意味で他律的な、それゆえ脆弱な秩序の構造を示しているのだが、その秩序へ依拠することで個人は独力で自己を形成できたのである。それゆえ、教養が誕生する瞬間に、実のところ教養はもはやすでに存在していない。(GS8, 104)

教養概念に内在する二律背反が指摘される。教養は個人が自律するために依拠する「秩序の構造」として機能するものである。しかし、何らかの秩序への依存は、すでに個人の自由を制限しており、他律的行為である。そのため、純粋な教養は存在しえない。そうした事態が考慮されている一方で、直前の箇所では教養の可能性についてもまた言及されていることを見逃してはならない。

しかし、今日教養の領域で生じていることは、依然として変わらずイデオロギー的な、以前の教養の形態に即してしか読み取られえない。[...]近年の悪の基準としては、唯一以前のものがあるだけである。それは、断罪されたその瞬間に、近年の惑乱の形式に対して、消え去りゆくものとして宥和の色合いを表す。いかなる過去の礼賛のためでもなく、ただそのためだけに、伝統的な教養へ立ち返るのである。(GS8, 102f.)

アドルノは、過去の礼賛において顕揚される、静的に実体化された教養概念とは峻別しつつ、現状を解説し、批判する基準を確保するために、理念として教養を保持する必要性を主張する。彼によれば、現代において、両義的な立場にある教養や文化には、「半教養への批判的自己省察」を通じてしか生き残る可能性はないのである(GS8, 121)。

29) トーマス・マンとの往復書簡から、雑誌での発表に先立ち、1950年にラジオで放送されていたことが明らかになっている。Vgl. Thomas Mann/ Theodor W. Adorno: Briefwechsel 1943–1955. Hrsg. von Christoph Gödde/ Thomas Sprecher. Frankfurt a. M. (Fischer) 2003, S. 62.

4 ドイツ講演『ハイネという傷』

こうした文化観を抱いていたアドルノにとって、1956年にラジオ講演『ハイネという傷』を行った当時のハイネ受容は、まさに「半教養」的であっただろう。1950年代の西ドイツでは、東西冷戦も手伝い、東ドイツで顕揚されたハイネのラディカルで自由主義的な側面は抑圧された。³⁰⁾そして、美的観点からハイネは等閑視、あるいは過剰に批判されることになる。³¹⁾肯定的評価は珍しく、「作品内在解釈」が急速に広がったアカデミズムでも事態は同様であった。1956年のハイネ没後100周年においても、国家やアカデミズムの関与はほとんどなく、当時マンダリンが再び支配的となる中、ハイネは黙殺されたのである。

フランクフルト社会研究所の再建に伴い、亡命知識人として一躍脚光を浴びたアドルノは、『ミニマ・モラリア』などの出版によりその地位を確かなものにし、³²⁾テレビやラジオにも数多く登場した。³³⁾戦後ドイツで広範な聴衆を想定できる立場にあった彼はまた、何かを発言する際には受容の側面にも意識的であった。例えば、1962年の第一回ヨーロッパ教育者会議における口頭報告がその翌年に出版される際には、「もし彼〔アドルノ〕が、事物に即した記述という義務を果たすために書かねばならないのと同じように話すとするれば、理解されないことでしょう。しかしながら、語られることは何一つ、テキストから要求される水準には達しえないのです」(GS20-1, 360)と注意書きが添えられている。注目すべきことに、当時彼は、自らのラジオでの発言がどのように受容されているか知るため、収録後に自らの講演を理解できているか繰り返し担当者に確認してもいた。³⁴⁾難解な思想家という一般イメージとは異なり、何かを語る際、アドルノは聴衆の理解に力点を置いていたのである。³⁵⁾先述したように、アドルノはすでに亡命時から現実の具体的状況の中で行う時勢への抵抗を構想していたが、こうした当時の状況や意識を念頭に置けば、彼がアメリカ講演とは異なる形で、ラジオというメディアを通じ、ハイネをめぐる「半教養」現象に批判を行おうと考えたことは想像に難くない。なによりもそれは、単なる「再評価」ではなく、印象的な「傷」³⁶⁾という題からも読み取

30) Vgl. Hermand, a. a. O., S. 194.

31) Ebd., S. 194-199; Goltschnigg/ Steinecke, a. a. O., S. 135ff. ハイネ受容に関する以下の記述は、主にゴルトシュニツクとシュタイネッケの研究をもとにしている。

32) Vgl. Demirović, a. a. O., S. 525ff; ミュラー＝ドーム, 前掲書, 429-435頁。

33) Vgl. Albrecht/ Behrmann u. a., a. a. O., S. 203-246.

34) Ebd., S. 239.

35) アルプレヒトらの研究を参照し、「過去の克服」をめぐるアドルノの講演を題材に、一般への理解を求めた彼の姿勢を分析したものとして、Vgl. Emil Walter-Busch: Geschichte der Frankfurter Schule. Kritische Theorie und Politik. München (Wilhelm Fink) 2010, S. 164-175.

36) ハイネに対して「傷」のメタファーを先駆的に用いたのはヤーコプ・ヴァッサーマンである。Vgl. Jacob Wasserman: Mein Weg als Deutscher und Jude. Berlin (S. Fischer) 1921, hier. S. 56-59. もっともアドルノが言及するのはクラウスであり、管見の限りヴァッサーマンへの参照は見られない。しかし、アドルノは1900年代初頭以降のハイネ受容を

ることができよう。では、アドルノの本来の目論見はどこにあったのか。

最初に講演を概観しておくとして、まず戦後ドイツとハイネの問題が示唆され、散文作家ハイネが簡単に論じられた後、クラウスのハイネ批判に話が移り、資本主義と抒情詩という構図でハイネの詩の商業性について分析が行われる。ハイネは詩の商品的性格を暴露し、自律的芸術の仮象を暴いたが、「まさにその点を後世の人々は恥じる」(GS11, 97)のである。そして、こうした特性がハイネのユダヤ性と結びつけられる。最後に講演の結びで、『歌の本』の中の、アメリカ講演とは異なる詩群「帰郷」から引用がなされ、ハイネだけでなく、万人が存在と言語に「傷」を負っているものであり、その傷は宥和した社会でのみ治癒するのだと結ばれる。ハイネにおいて批判者が自律的な芸術の不可能性に直面するという展開は、アメリカ講演の議論が踏襲されているが、戦後ドイツという文脈の意識や、ハイネのユダヤ性の規定はドイツ講演に特有のものである。以下では、この差異に着目しつつ、講演全体のアドルノの企図、およびタイトル「傷」の意味を解明していきたい。

冒頭では、ハイネに即して戦後ドイツの問題を語る意志が明確に提示される。

ハイネの死後 100 年がたった今日、真摯にハイネの追憶に寄与し、単なる祝辞を述べるに留まろうとしない者は、一つの傷について語らねばなりません。つまり、ハイネと彼のドイツの伝統に対する関係において疼き、とりわけ第二次世界大戦後のドイツにおいて抑圧された事態についてです。(GS11, 95)

ハイネをめぐる生じたことと、「第二次世界大戦後のドイツにおいて抑圧された事態」という同時代的な問題が一つに結びつけられる。ハイネにおいて顕在化したマンダリン的な復古主義の問題がアドルノの念頭にあると推察できよう。そのことは、講演での言葉遣いからも読み取れる。引用に続く箇所ではハイネの否定的評価に話が及ぶ際、ハイネが「1900 年ごろ、精神的に責任のある人々 (d[ie] geistig Verantwortlichen) の間で不評を買いました」(GS11, 95)と語られているが、「精神的」という語はドイツの歴史文化と関わりが深く、³⁷⁾直後にゲオルゲ・クライスやクラウスがその代表例に挙げられていることからわかるように、文化保守的なニュアンスを含意している。なお、興味深いことに、アメリカ講演とは異なり両者の批判は同列で扱われていない。アドルノはゲオルゲ・クライスの批判をナショナリズムに由来すると述べ、言語批判の観点からハイネの美的側面をより詳細に論じたクラウスに重点を置く。単なるナショナリズムに還元できない、ハイネの詩の芸術性と戦後ドイツの問題との関連、これがドイツ講演の主眼なのである。

視野に入れているため、クラウスに類似した当時の批判を念頭に「傷」という語を選択したと考えられる。

37) ドレフュス事件以降フランスで「知識人」という言葉が定着していったのに対して、1950-60 年代に至るまで、例外はあるものの、伝統的にドイツでは知識層の人々が自らのことを「精神的な人間 (der geistige Mensch)」あるいは「精神の人 (der Geistige)」と形容する慣習があった。Vgl. Dietz Berling: Die Epoche der Intellektuellen 1898-2001. Geburt — Begriff — Grabmal. 2. Aufl. Berlin (Berlin University Press) 2011, S. 220-272.

アメリカ講演との決定的な差異は、ハイネの詩をユダヤ性の観点から解釈している点である。ホーエンダールは、先述した『啓蒙の弁証法』や、1959年に発表された『過去の克服とは何を意味するのか』をもとに、アドルノがユダヤ性の本質主義的規定を退けているにもかかわらず、ハイネにはその特性を想定していることを指摘し、その矛盾をアドルノのエッセイ理論から説明している。エッセイという形式は、哲学や科学のような体系性を欠き、純粋な芸術でもないため、絶えず文化産業に転じる危険性と隣り合わせであるが、それと同時に、体系的統一の主張や純粋な芸術の標榜が欺瞞的となった時代において、批判性を保持しようとアドルノは捉えていた。³⁸⁾ このようにホーエンダールはアドルノのエッセイ理論をまとめ、それがドイツ講演に反映しているとして、次のように主張する。アドルノは、ユダヤ的出自を持つハイネにとって表現媒体であるドイツ語が疎遠であったため、その詩は真正の叙情的言語によるものではなく、商業性を帯びているという解釈を行っている。つまり、アドルノはユダヤ性に着目することで、エッセイ理論と同様に純粋芸術と文化産業の間でハイネを捉えているのである。³⁹⁾ このホーエンダールの説明は、60年代近くに発表された『過去の克服とは何を意味するのか』において、なおユダヤ性が経済・心理的特性である「レットル思考」から導かれているため、ドイツ講演の矛盾を指摘している点で妥当である。しかしながら、ホーエンダールが未検討のアメリカ講演では、商業と純粋な芸術という軸で議論が展開されていたものの、ユダヤ性の観点からの解釈は退けられていた。それゆえ、エッセイ理論との関連だけでは、ハイネ理解の基本線とユダヤ性についての見解が亡命時から大きく変化していないにもかかわらず、なぜドイツ講演でのみ、あえてハイネのユダヤ性が焦点化されているのかを説明できない。

アドルノがユダヤ性の問題へと議論をスライドさせるのは、「商品と交換」に刻まれたハイネの詩が、「精神の解放は人間の解放ではなく、それゆえに精神の解放もなかったこと」を告げ、自律した芸術の不可能性を批判者に認識させると述べた後である (GS11, 97)。

しかし、他者が打ち明ける屈辱により、自身の屈辱の秘密に気づく者の怒りは、サディスト的なたしかさで相手の一番の弱みに、つまりユダヤ人解放の挫折に結びつくのです。というのも、コミュニケーション言語から借用された彼の流暢さと自明性は、故郷のように言語に安住する立場とは正反対のものだからです。(GS11, 97f.)

素直に解釈すれば、「他者」であるハイネの詩に接して、芸術の不可能性に気づかされる批判者は、その怒りを、「ユダヤ人解放の挫折」に、すなわちハイネが同化に失敗したユダヤ人であるという事態に振り向けるということになる。ハイネの詩が「流暢さと自明性」を持ち、商業的性格を帯びる原因が、「固有の言葉」(ドイツ語) (GS11, 98)の外に

38) Vgl. Hohendahl, a. a. O., S. 219f.

39) Vgl. Ebd., S. 220f.

彼が位置しているという事情に帰せられるのだ。しかしここであえて、「他者」というマイノリティーを思わせる一般的な言葉が選択されていることは、⁴⁰⁾ ハイネに留まらないより広範な文脈を示唆している。そして、クラウスの評価から議論を始め、ハイネの言語表現とユダヤ性の連関に言及する文脈で、「故郷のように言語に安住する立場」という、当時の復古主義を代表する哲学者ハイデガーを意識した言い回しが用いられるのは、⁴¹⁾ かなり唐突である。ハイネの一般化とハイデガーの暗示は、冒頭で示されていた、「第二次世界大戦後のドイツで抑圧された事態」を語る意志、および戦後のハイネ受容と文化情勢との密接な関連を想起すれば一つの線で結ばれる。アドルノの念頭にあるのは、まさに戦前のマンダリン的潮流が復活した戦後の知的状況なのである。それを踏まえ、上の引用を再検討する必要があるだろう。ハイネが芸術の自律性の仮象を暴くことで「自身の屈辱の秘密に気づく者」とは、純粋な精神の領域を標榜するマンダリンを示唆しており、欺瞞を突き付ける者を「他者」として排除する理由が「ユダヤ人解放の挫折」に求められてきたと語ることで、精神文化の固持が民族共同体イデオロギーを掲げるナチズムへと結びついていった歴史的趨勢が、ハイネに即して提示される。そして、ユダヤ性について言及したこの段落の末尾にある、「これは今日もなおハイネの名にまつわるトラウマである」(GS11, 98)という一節からも読み取れるように、戦前の問題が戦後ドイツに引き継がれ、それがハイネをめぐる現前化している事態が指摘されているのである。確かにアドルノはここで、ハイネの母がドイツ語をうまく使用できなかった事情に触れ、模倣的で商業性を帯びたハイネの「同化的な言語は完全な同一化に失敗した言語なのです」(GS11, 98)と語っており、「同化ユダヤ人」の性質を素朴に想定しているように思われる。しかし、ハイネのユダヤ性が、ハイネの受容と、戦前から続く戦後ドイツの問題との関連の中で言及されていることを考慮すべきである。ユダヤ性の規定は、戦前のマンダリン的文化的保守が再び支配的となる中で、ハイネを排除されてきたマイノリティー(ユダヤ人・同化ユダヤ人)の側に位置づけることによって、ドイツで生じた直近の歴史的情勢を聴衆に一層明瞭な形で想起させるためにアドルノが持ち出したものだと考えられる。

アドルノの同時代的状況への視線を踏まえ、ドイツ講演の結びを分析すると、講演全体を通じたアドルノの企図と、タイトル「傷」に込められた意味も明らかとなってくる。ユダヤ性に触れた後、アドルノは、「あらゆる表現が苦しみの痕跡であるとするれば、彼[ハイネ]は固有の言語の喪失という自身の欠落を、亀裂の表現に作り替えることができたのです」(GS11, 98)とハイネの試みを評価し、次のように講演を締めくくる。

40) 細見は、「他者」という言葉の選択については詳述していないが、この箇所をマイノリティーとマジョリティというより広範な問題圏で解釈している。細見、前掲書、127-130頁。

41) 同上、126頁。また以下の邦訳の訳注4も参照、テーオドル・アドルノ：ハイネという傷(三光長治訳)『文学ノート1』(みすず書房)2009、110-118頁)118頁。

故郷喪失に向けられたその〔ハイネの〕抒情詩は、疎外そのものを最も身近な経験領域に引き寄せようとする努力なのです。ハイネの感じていた運命が文字通り実現した今日においては、しかしながら、故郷喪失は同時に万人のものとなりました。疎外された者がそうであったように、あらゆる人が存在と言語に傷を負っているのです。[...]ハイネという傷は、宥和が達成された社会において初めてふさがれるでしょう。(GS11, 100)

ユダヤ人のステレオタイプである「故郷喪失」という表現でハイネの詩が指示されているが、それは転じて万人にあてはまるものであるとされる。批判者である「精神的に責任のある人々」はハイネの詩の商業性をユダヤ的特質に帰していたが、もはや万人が純粹な文化を体現できないのである。そしてこの洞察は、当時の文化の復古主義の批判へとつながる。タイトルにある「ハイネという傷」は、資本主義で精神文化が被った万人にとっての「傷」であり、精神文化の顕揚がナチズムというカタストロフィーに結びついた過去を持つ戦後ドイツにおいて、その「傷」を正視するよう訴えかけているのである。

ドイツ講演の結論部で、万人がもはや精神文化を体現できないと宣言される時、そうした状況を判読するための基準として、文化の概念が完全に捨て去られることはない。まさにこの点は、前章で考察した当時の文化観につながっていく。アドルノはハイネをめぐる「半教養」現象への批判を通じて、旧来の文化概念との連続性をどこかで保とうと試みていたのである。しかし、ドイツ講演におけるアドルノの試行は、文化理論に回収されえない。注目すべきことに、時代状況との連関の中で、苦しみを表現にもたらししたハイネが評価され、救済されている。⁴²⁾「傷」として打ち捨てられ、古典的カノンとしての地位を与えられてこなかったハイネを芸術の可能性という観点から再評価し、聴衆に訴えかけたアドルノは、戦後ドイツにおいて、旧来の文化概念を欺瞞的でない形で保持しようとするに留まらず、それを拡張していくことを志向していたのである。

おわりに

前述したアルブレヒトたちは、手紙やメモ、当時の記録など広範な一次資料をもとに、大学教育やマス・メディアなどに見られる戦後ドイツでのアドルノの活動を再構成し、それを当時の社会状況との関連から分析した。そして、西ドイツの国家アイデンティティーである「過去の克服」をめぐる解釈の枠組みの提供という、従来分析の俎上に載せられなかったアドルノの「形成」的な役割を明らかにした。⁴³⁾ ここでは「批判」とい

42) なお、当時アドルノは芸術や哲学の意義を、しばしば「苦しみの表現」として捉えている。芸術に関しては Vgl. GS11, S. 422ff.; 哲学については Vgl. Theodor W. Adorno: Vorlesung über Negative Dialektik. In: Ders.: Nachgelassene Schriften. Bd. 16. Hrsg. von Rolf Tiedemann. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 2003, S. 157f.

43) 注 8 参照。

う観点が十分に考慮されていなかったが、⁴⁴⁾ 新たにシュナイダーが、アルブレヒトらの議論を引き継ぎつつ、アドルノがナチスに汚染されたドイツ文化を放棄せずにアウシュヴィッツについて批判を行ったため、ナチスに加担した父を持つ学生たちの模範になりえたと評し、批判と再建の二面性を指摘している。⁴⁵⁾ これらの研究では、アドルノの果たした社会的な機能 (die soziale Funktion)、つまり、当時の社会において彼の活動がどのような意味や役割を有していたかが主題となっている。⁴⁶⁾ そのため、「形成」という社会的役割に還元できない彼自身の企図に関しては議論がなされていない。しかしながら、個別的な文脈に即し、アドルノの本来の意図に焦点を当て、それを精緻に分析することで、シュナイダーにおいても依然として二分法的に捉えられている「批判」と「形成」の両要素の新たな関係性が見えてくる。

亡命時と戦後の西ドイツで構想されていた文化観を視野に収め、二つのハイネ講演を比較考察することで、自らの直面している状況を意識し、個別的文脈に即して時代情勢への批判を展開しようとするアドルノの姿が浮き彫りになる。そうした傾向はとりわけドイツ講演において顕著であり、復古主義という時代情勢に直面したアドルノは、ラジオを通じたハイネ講演という具体的な活動を通じ、聴衆へと訴えかけていたのである。もっとも、ロッテ・トービッシュやジークフリート・クラカウアーが書簡でアドルノに伝えた感想から察するに、当時ドイツ講演が、クラウスのハイネ批判の延長、⁴⁷⁾ あるいは単なるハイネ批判として、⁴⁸⁾ 消極的に受容されていた可能性がある。それは、先述したように、アドルノが叙述と語りの相違を考えていたからこそ、逆説的に生じた乖離なのかもしれない。しかしながら、同時代人による受容の中で誤って解釈され、それゆえに社会的な機能という観点からは必然的に零れ落ちてしまうとしても、アドルノ自身の本来の企図からも救い出すべきものがあるはずである。アドルノは、ハイネのラジ

44) 藤野寛: あとがき: アメリカ合衆国・社会学・啓蒙——戦後のアドルノ／ホルクハイマー [『ゾチオロギカ——フランクフルト学派の社会学論集』(平凡社) 2012, 358–379頁] 370–376頁参照。

45) Christian Schneider: Deutschland I. Der exemplarische Intellektuelle der Bundesrepublik. In: Richard Klein/ Johann Kreuzer/ Stefan Müller-Doohm (Hrsg.): Adorno-Handbuch. Leben — Werk — Wirkung. Stuttgart (J. B. Metzler) 2011, S. 431–435.

46) アルブレヒトらの研究に関してヴァンターは、彼らが「観察者」としてフランクフルト学派の社会的な機能 (die soziale Funktion) を分析しているため、学派の理論それ自体を適切に視野に収めることができているだけでなく、「参加者」の視点から実際に学派の理論がどのように受容されたのかを十分に考慮できていないと批判している。Vgl. Rainer Winter: Kritische Theorie jenseits der Frankfurter Schule? Zur aktuellen Diskussion und Bedeutung einer einflussreichen Denktradition. In: Ders./ Peter V. Zima (Hrsg.): Kritische Theorie heute. Bielefeld (Transcript) 2007, S. 23–46, hier S. 26–30.

47) Vgl. Theodor W. Adorno/ Lotte Tobisch: Der Private Briefwechsel. Hrsg. von Bernhard Kraller/ Heinz Steinert. Wien (Droschl) 2003, S. 32f.

48) Vgl. Theodor W. Adorno/ Siegfried Kracauer: Briefwechsel. „Der Riß der Welt geht auch durch mich“ 1923–1966. Hrsg. von Wolfgang Schopf. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 2008, S. 497f.

オ講演という現実の場で文化批判を行うことで、伝統文化の保持と拡張を志向していたのであり、「批判」が同時に「形成」へと結びつくよう働きかけていたのであった。『ハイネという傷』は、マンダリン的文化保守の復古主義的潮流が支配的となり、文化と適切な関係を取り結ぶことが喫緊の課題であった戦後ドイツにおいて、重要な位置を有する試みであったといえるだろう。

Zwei Vorträge Adornos über Heine oder Kulturkritik und Gesellschaft

Hiroki HASHIMOTO

Theodor W. Adorno behandelte Heinrich Heine zweimal. Der bekanntere Vortrag ist *Die Wunde Heine*, der 1956 an dessen hundertsten Todestag vom Kölner Rundfunk ausgestrahlt wurde. Der zweite ist *Toward a reappraisal of Heine*, den Adorno 1948 an der Universität von Los Angeles auf Englisch vortrug. Hierbei anzumerken ist eine entscheidende Wendung im Leben Adornos, nämlich die Heimkehr nach Deutschland aus dem Exil in den USA, das aufgrund der antisemitischen Verfolgung und des Arbeitsverbots im nationalsozialistischen Deutschland erfolgte. Zu dieser Heimkehr entschloss er sich 1949. Die gesellschaftliche Lage, die Adorno in der BRD vorfand und die grundlegenden Einfluss auf seine Kulturtheorie ausübte, sowie die damalige deutsche Heine-Rezeption änderten seine Haltung zu diesem Thema. In der bisherigen Forschung zur Heine-Interpretation Adornos wird diese veränderte Einstellung kaum berücksichtigt. Das Hauptziel der vorliegenden Arbeit liegt im Herausarbeiten der Intention Adornos, mittels der Heine-Lektüre die zeitgenössische Lage zu kritisieren, zu welchem Zweck beide Vorträge unter den genannten Aspekten verglichen werden.

Bislang herrschte die Vorstellung vor, dass er sich von der amerikanischen Kultur distanzierte. Allerdings wird in neuerer Zeit seine Konzeption des Versuches, konkrete Kritik an der Kulturindustrie zu üben, hervorgehoben. Schon während seines Exils setzte er sich mit der Unmöglichkeit einer rein geistigen, von den gesellschaftlichen Verhältnissen unabhängigen Kultur und der Rolle der Kultur im Kapitalismus auseinander. Diese Problematik spiegelt sich im Heine-Vortrag wider, den Adorno in Amerika hielt. Sein Schwerpunkt liegt in der Neubewertung der Gedichte Heines. Dabei fällt auf, dass er die Interpretation Heines aus der jüdischen Perspektive ablehnte. Adorno zufolge soll der Gegensatz zwischen Lyrik und Kommerzialisierung thematisiert werden. Heine habe

aufgedeckt, dass echte Lyrik unter den Bedingungen der Industriegesellschaft unmöglich sei, während er zugleich die Tradition der Lyrik gegen die Zeitläufe zu bewahren versuchte. Bedenkt man, dass der Vortragsort in den USA lag, wo sich der Kapitalismus am schnellsten entwickelte, so ist wohl nicht von der Hand zu weisen, dass Adornos Intention eine Kritik an der gesellschaftlichen Lage in den USA war.

In der BRD dagegen war Adorno mit einem restaurativen geistigen Klima konfrontiert. Seit der Adenauer-Ära dominierten die Kulturkonservativen, die schon vor dem Krieg den intellektuellen Bereich beherrscht hatten, erneut das kulturelle Leben des Landes. Ihre elitäre Berufung auf Kultur und Geist sowie Identifizierung dieser mit der Nation, knüpften an den Antisemitismus der Nazi-Ideologie an. Nach seiner Rückkehr warnte Adorno vor den restaurativen Tendenzen in der Kultur und versuchte einen anderen, besseren Umgang mit der Kultur zu konzipieren. Seiner Meinung nach sei die Existenzmöglichkeit der Kultur nur durch Kritik am Aufkommen von Halbbildung gesichert.

Die bundesdeutsche Heine-Rezeption der 1950er Jahre stand unter dem Einfluss kultureller Restauration. Er wurde aus poetischen Gründen totgeschwiegen. In seinem 1956 in Deutschland gehaltenen Vortrag übernahm Adorno prinzipiell die Interpretation, dass Heine die Unmöglichkeit der Lyrik herausgearbeitet habe, zeigt aber seinen Willen zur Kritik unvermittelter als im amerikanischen Vortrag. Dies erkennt man bereits am im Titel enthaltenen Wort „Wunde“ sowie an der zu Anfang des Vortrags hergestellten Verbindung zwischen der Rezeption Heines und der Situation in der BRD. Bemerkenswert ist auch, dass Adorno hier den poetischen Charakter Heines als jüdisch bezeichnet. Diese naive anmutende Zuordnung scheint zu Adornos Theorie von Antisemitismus in Widerspruch zu stehen. Allerdings muss hier sein Verweis auf die zeitgenössische Situation berücksichtigt werden. Adorno weist die Heine unterdrückenden Kulturkonservativen darauf hin, dass ihre Haltung derjenigen gleiche, die vor dem zweiten Weltkrieg zu Nationalsozialismus und Antisemitismus geführt hatte. Er hält ihnen entgegen, dass nach den schrecklichen Erfahrungen der Vergangenheit nun niemand mehr eine „reine“ Kultur propagieren könne. Zwar hängt dieser Versuch der Kulturkritik an der damaligen Situation mit der Kulturtheorie Adornos zusammen, stimmt aber nicht gänzlich mit ihr überein. Indem er das Aufkommen einer Heine betreffenden Halbbildung kritisierte und diesen aus dem klassischen Kanon verbannten Dichter rettete, strebte er danach, den Begriff der Kultur nicht nur zu bewahren, sondern auch zu erweitern.

Die aufgezeigten Intentionen Adornos, vor allem hinsichtlich des deutschen Vortrags, eröffnen einen neuen Blickwinkel auf seine intellektuelle Tätigkeit in der BRD. Während die frühere Forschung besonders die sozialkritische Rolle Adornos betonte, wird in neuerer Zeit behauptet, dass Adorno zu der intellek-

tuellen Gründung der BRD beigetragen habe. Dieser Ansatz fokussiert darauf, welche Bedeutung Adorno in der betreffenden Gesellschaft hatte. Doch mangelt es der Analyse von Adornos sozialer Funktion oft an der Berücksichtigung seiner eigentlichen Intention. Wie oben nachgewiesen wurde, umfasst die Kulturkritik Adornos zwei Aspekte zugleich: die Kritik der zeitgenössischen Situation und die Bewahrung sowie Erweiterung der Kultur, „Kritik“ und „Gründung“.